



2020 年度 大阪医科大学(前期) 一般入学試験

1

(1) $P_{n-1}A_n = 1 - a_{n-1}$ である。

直角三角形 $P_{n-1}P_nA_n$ について, $\angle P_{n-1}A_nP_n = \frac{\pi}{3}$ より,

$$P_{n-1}A_n : A_nP_n = 2 : 1$$

$$(1 - a_{n-1}) : a_n = 2 : 1$$

$$2a_n = 1 - a_{n-1}$$

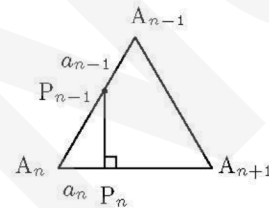
$$\therefore a_n = -\frac{1}{2}a_{n-1} + \frac{1}{2}$$

(2) $a_n - \frac{1}{3} = -\frac{1}{2} \left(a_{n-1} - \frac{1}{3} \right)$ であるから, 等比数列の一般項より,

$$a_n - \frac{1}{3} = \left(-\frac{1}{2} \right)^n \left(a_0 - \frac{1}{3} \right)$$

$$\therefore a_n = \frac{1}{3} + \left(-\frac{1}{2} \right)^n \left(a_0 - \frac{1}{3} \right)$$

したがって, $\lim_{n \rightarrow \infty} a_n = \frac{1}{3}$



2

(1) $AB = \cos \theta$, $AC = \sin \theta$ である。

点 A から辺 BC に引いた垂線と辺 BC の交点を D とする。

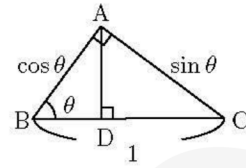
$\triangle ABC \sim \triangle DBA \sim \triangle DAC$ より、

$$\frac{BD}{AB} = \frac{AD}{AC} = \cos \theta, \quad \frac{AD}{AB} = \frac{CD}{AC} = \sin \theta$$

$$\therefore AD = \sin \theta \cos \theta, \quad BD = \cos^2 \theta, \quad CD = \sin^2 \theta$$

V は、線分 AD を底面の半径とする 2 つの円すいの体積の和であるから、

$$\begin{aligned} V &= \pi AD^2 \cdot (BD + CD) \cdot \frac{1}{3} \\ &= \frac{\pi}{3} \cos^2 \theta \sin^2 \theta (\cos^2 \theta + \sin^2 \theta) \\ &= \frac{\pi}{3} \sin^2 \theta \cos^2 \theta \end{aligned}$$



(2) $l = AB + AC + BC = \sin \theta + \cos \theta + 1$ であり、 $S = \frac{1}{2} AB \cdot AC = \frac{1}{2} \sin \theta \cos \theta$ である。

よって、

$$\begin{aligned} \frac{V}{Sl} &= \frac{\frac{\pi}{3} \sin^2 \theta \cos^2 \theta}{\frac{1}{2} \sin \theta \cos \theta (\sin \theta + \cos \theta + 1)} \\ &= \frac{2\pi}{3} \cdot \frac{\sin \theta \cos \theta}{\sin \theta + \cos \theta + 1} \end{aligned}$$

ここで、 θ の値の範囲は $0 < \theta < \frac{\pi}{2}$ であり、 $x = \sin \theta + \cos \theta$ とおく。いま、

$$x = \sqrt{2} \sin \left(\theta + \frac{\pi}{4} \right) \quad \left(\text{ただし、} \frac{\pi}{4} < \theta + \frac{\pi}{4} < \frac{3\pi}{4} \right)$$

であるから、 $1 < x \leq \sqrt{2}$ である。特に、 $x = \sqrt{2}$ となるのは

$$\theta + \frac{\pi}{4} = \frac{\pi}{2} \quad \therefore \theta = \frac{\pi}{4}$$

のときである。また、

$$x^2 = \sin^2 \theta + 2 \sin \theta \cos \theta + \cos^2 \theta \quad \therefore \sin \theta \cos \theta = \frac{x^2 - 1}{2}$$

であるから、

$$\begin{aligned} \frac{V}{Sl} &= \frac{2\pi}{3} \cdot \frac{x^2 - 1}{2(x + 1)} \\ &= \frac{\pi}{3} (x - 1) \end{aligned}$$

である。 $\frac{V}{Sl}$ は x についての増加関数であるから、 $x = \sqrt{2}$ のときに、最大値 $\frac{\pi}{3}(\sqrt{2} - 1)$

をとる。このとき、 $\theta = \frac{\pi}{4}$

(1) A となる確率は、2 個の球を同時に取り出すと見て、

$$P(A) = \frac{{}^m C_1 \cdot {}^m C_1}{{}^{2m} C_2} = \frac{m}{1} \cdot \frac{m}{1} \cdot \frac{2}{2m(2m-1)} = \frac{m}{2m-1}$$

B となる確率は、4 個の球を同時に取り出すと見て、

$$\begin{aligned} P(B) &= \frac{{}^m C_2 \cdot {}^m C_2}{{}^{2m} C_4} \\ &= \frac{m(m-1)}{2} \cdot \frac{m(m-1)}{2} \cdot \frac{24}{2m(2m-1)(2m-2)(2m-3)} \\ &= \frac{3m(m-1)}{2(2m-1)(2m-3)} \end{aligned}$$

(2) $A \cap B$ となる確率は、最初に 2 個の球を同時に、続いて 2 個の球を同時に取り出すと見て、

$$\begin{aligned} P(A \cap B) &= \frac{{}^m C_1 \cdot {}^m C_1}{{}^{2m} C_2} \cdot \frac{{}^{m-1} C_1 \cdot {}^{m-1} C_1}{{}^{2m-2} C_2} \\ &= \frac{m}{1} \cdot \frac{m}{1} \cdot \frac{2}{2m(2m-1)} \cdot \frac{m-1}{1} \cdot \frac{m-1}{1} \cdot \frac{2}{(2m-2)(2m-3)} \\ &= \frac{m(m-1)}{(2m-1)(2m-3)} \end{aligned}$$

(3) A も B も起こらない確率は $P(\overline{A \cap B})$ である。

$$\begin{aligned} P(\overline{A \cap B}) &= P(\overline{A \cup B}) \\ &= 1 - P(A \cup B) \\ &= 1 - \{P(A) + P(B) - P(A \cap B)\} \\ &= 1 - \frac{m}{2m-1} - \frac{3m(m-1)}{2(2m-1)(2m-3)} + \frac{m(m-1)}{(2m-1)(2m-3)} \\ &= \frac{m-1}{2m-1} - \frac{m(m-1)}{2(2m-1)(2m-3)} \\ &= \frac{(m-1)\{2(2m-3) - m\}}{2(2m-1)(2m-3)} \\ &= \frac{3(m-1)(m-2)}{2(2m-1)(2m-3)} \end{aligned}$$

4

(1) $\sqrt{a} + \sqrt{b} = p$ とおく。 p は有理数である。

$$(\sqrt{b})^2 = (p - \sqrt{a})^2$$

$$b = p^2 - 2p\sqrt{a} + a$$

$$\therefore \sqrt{a} = \frac{p^2 + a - b}{2p}$$

a, b, p は有理数なので、 \sqrt{a} は有理数である。同様に、 \sqrt{b} が有理数であることも示せる。

(2) $\sqrt{a} + \sqrt{b} + \sqrt{c} = q$ とおく。 q は有理数である。

$$(\sqrt{b} + \sqrt{c})^2 = (q - \sqrt{a})^2$$

$$b + 2\sqrt{bc} + c = q^2 - 2q\sqrt{a} + a$$

$$\therefore 2q\sqrt{a} + (b + c - a - q^2) = -2\sqrt{bc}$$

ここで、 $b + c - a - q^2 = r$ とおくと、 a, b, c, q が有理数であることから、 r は有理数である。

$$(2q\sqrt{a} + r)^2 = (2\sqrt{bc})^2$$

$$4aq^2 + 4qr\sqrt{a} + r^2 = 4bc$$

$$\therefore \sqrt{a} = \frac{4bc - 4aq^2 - r^2}{4qr}$$

a, b, c, q, r は有理数なので、 \sqrt{a} は有理数である。同様に、 \sqrt{b}, \sqrt{c} が有理数であることも示せる。

別解 $\sqrt{a} + \sqrt{b} + \sqrt{c} = q$ とおく。 q は正の有理数である。

$$(\sqrt{b} + \sqrt{c})^2 = (q - \sqrt{a})^2$$

$$b + 2\sqrt{bc} + c = q^2 - 2q\sqrt{a} + a$$

$$2q\sqrt{a} + 2\sqrt{bc} = q^2 + a - b - c$$

$$\therefore \sqrt{a} + \sqrt{\frac{bc}{q^2}} = \frac{q^2 + a - b - c}{2q}$$

$\frac{q^2 + a - b - c}{2q}$ は有理数であるから、(1) より、 $\sqrt{a}, \sqrt{\frac{bc}{q^2}}$ はともに有理数である。同様に、 \sqrt{b}, \sqrt{c} も有理数であることが示せる。

5

(1) 部分積分により,

$$\begin{aligned} \int_0^x t^n \cos t \, dt &= \left[t^n \sin t \right]_0^x - n \int_0^x t^{n-1} \sin t \, dt \\ \therefore c_n(x) &= -n s_{n-1}(x) + x^n \sin x \quad (\because n \geq 1) \\ \int_0^x t^n \sin t \, dt &= \left[-t^n \cos t \right]_0^x + n \int_0^x t^{n-1} \cos t \, dt \\ \therefore s_n(x) &= n c_{n-1}(x) - x^n \cos x \quad (\because n \geq 1) \end{aligned}$$

(2) 部分積分により,

$$\begin{aligned} \int_0^x t^n \cos(x-t) \, dt &= \left[-t^n \sin(x-t) \right]_0^x + n \int_0^x t^{n-1} \sin(x-t) \, dt \\ &= 0 + \left[n t^{n-1} \cos(x-t) \right]_0^x - n(n-1) \int_0^x t^{n-2} \cos(x-t) \, dt \\ \therefore f_n(x) &= n x^{n-1} - n(n-1) f_{n-2}(x) \quad (\because n \geq 2) \end{aligned}$$

別解

$$f_n(x) = \int_0^x t^n (\cos x \cos t + \sin x \sin t) \, dt = c_n(x) \cos x + s_n(x) \sin x$$

であるから, (1) より,

$$\begin{aligned} f_n(x) &= \{-n s_{n-1}(x) + x^n \sin x\} \cos x + \{n c_{n-1}(x) - x^n \cos x\} \sin x \\ &= -n s_{n-1}(x) \cos x + n c_{n-1}(x) \sin x \\ &= -n \{(n-1) c_{n-2}(x) - x^{n-1} \cos x\} \cos x \\ &\quad + n \{-(n-1) s_{n-2}(x) + x^{n-1} \sin x\} \sin x \\ &= n x^{n-1} (\cos^2 x + \sin^2 x) - n(n-1) \{c_{n-2}(x) \cos x + s_{n-2}(x) \sin x\} \\ &= n x^{n-1} - n(n-1) f_{n-2}(x) \end{aligned}$$

(3) $\left(\begin{array}{l} h(t) \text{ は, } x^3 \text{ が現れる } f_4(x) \text{ と剰余項の } f_2(x) \text{ を用いて, } a f_4(x) + b f_2(x) = x^3 \text{ が作れる} \\ \text{だろうと予想し, } a, b \text{ を求めることで導かれるが, } h(t) \text{ を導く過程は解答に書かなくて} \\ \text{もよい. 導いた } h(t) \text{ が問題の条件をみたすことを記述すれば満点である.} \end{array} \right)$

$h(t) = \frac{1}{4} t^4 + 3t^2$ とすると,

$$\begin{aligned} \int_0^x h(t) \cos(x-t) \, dt &= \int_0^x \left(\frac{1}{4} t^4 + 3t^2 \right) \cos(x-t) \, dt \\ &= \frac{1}{4} \int_0^x t^4 \cos(x-t) \, dt + 3 \int_0^x t^2 \cos(x-t) \, dt \\ &= \frac{1}{4} f_4(x) + 3 f_2(x) \\ &= \frac{1}{4} \{4x^3 - 12 f_2(x)\} + 3 f_2(x) \quad (\because (2)) \\ &= x^3 \end{aligned}$$

と条件をみたす。よって, $h(t) = \frac{1}{4} t^4 + 3t^2$

【 講 評 】

例年通り、大問数5題で、すべて記述式となっている。例年に比べて非常に易しく、計算量も少ないため、落とせない問題が多い。7割以上取りたい。

1. 数列	難易度：易
問題文で与えられた状況を図にかけば、漸化式を立てる事も解くこともたやすい。確実に取りたい問題。	
2. 図形と計量・三角関数	難易度：やや易
(2)は、三角関数が入った分数関数の最大値であるが、三角関数の典型的なテクニックを用いることで数Ⅲの微分を回避できることに気づけると易しい。	
3. 確率	難易度：やや易
場合分けも一切なく、誘導も丁寧だったので、満点も取りやすい問題。 (3)で計算間違いをしないようにしたい。	
4. 数と式	難易度：やや易
(1) は、根号が一つだけになるように計算すれば簡単に示せる。 (2) は、(1)の結果を用いるか、計算方法を応用して示せばよい。難しくはない。	
5. 積分法	難易度：標準
(1) は、部分積分法で簡単に示せる。 (2) は、(1)の結果を用いても、部分積分法で(1)を無視してもよい。取りたい問題。 (3) は、(2)の結果から、答えになる関数を予想できたかがポイントであった。今年の問題では、唯一、骨のある問題だったかもしれない。	

●●●●
最終合格へのラストスパート!!!!!!

医学部後期入試対策講座

埼玉医科大・金沢医科大・藤田医科大

大阪医科大・関西医科大・近畿大・久留米大 申し込み受付中

お問い合せは  0120-148-276

イシャ ニナロウ